新宿山吹だより

都立新宿山吹高等学校通信
令和５年度第９号
【令和５年11月10日】

新宿山吹だよりは、保護者の皆さんにも読んでもらって下さい。

古書店街の思い出

校　長　永浜　裕之

過ごしやすい季節を迎え、私は先日、神田駿河台を散策してきました。高校時代は、楽器店や古本屋巡りのために、結構な頻度で訪れていた思い出の場所です。当時、大学が集う駿河台周辺は、**「日本のカルチェラタン」**と呼ばれていました。

「カルチェラタン」とはフランス語で**「ラテン語地区」**と言う意味です。もともとは、セーヌ川左岸のパリ５区から６区を指してカルチェラタンと呼ばれていました。カルチェラタンには、ヨーロッパ最古の大学の一つ、旧パリ大学をはじめ多くの教育機関がおかれ、中世以降、ヨーロッパ中から学者や学生が集まり、いわゆる学生街となっていました。彼らは異なる母国語を持っていたため、**共通の言語としてラテン語を用いて意思疎通をしていました。**ゆえに、「ラテン語地区」、フランス語で「カルチェラタン」と呼ばれます。

1960年代後期、世界的に学生運動が勃発したときも、パリの「カルチェラタン」が発火点となりました。体制に反発する学生たちは、石畳の敷石を剥がして投げ、怒りをあらわにしました。同じ頃、日米安保条約自動延長反対を掲げ、神田駿河台でも、というか、日本各地で学生運動が起きていました。当時私は７歳で、優秀なはずの大学生が、何故、そんなに怒っているのか理解できませんでした。ただ、世の中全体が騒然としていた印象が残っています。

本題からそれましたが、私が今、神田駿河台を訪れる目的の多くは、古書店巡りです。

高校生の頃は、グリム童話やイソップ物語といった、寓話がお気に入りでした。特に、絵本のような体裁で、簡単な英語で書かれた洋書は、好奇心をそそるものでした。

寓話は、教訓や知恵などの教えを楽しみながら吸収できる点が魅力です。話の中心に教えがありますが、物語が教えの「説教臭さ」を抑えてくれます。多くの人は説教に拒否感を抱いてしまうものです。しかし、寓話に記された物語なら気にならず、楽しみながら教え、教訓を見つけ出すことができると考えます。

先日、古書店街で購入した洋書の中から今回は２点紹介します。話の結びに、話から学べる教訓もあわせて紹介します。

一つ目は、「ジャナカ王とアシュタバクラ」というお話です。

昔、インドにジャナカ王という王様と、アシュタバクラという大臣がいました。王様が大臣に意見を求めると、アシュタバクラはいつもこう答えます。「王様、起きたことはすべて最高です。起こらなかったこともすべて最高でございます」。

ある日、王様が指にケガをしましたが、大臣はいつものように「起きたことはすべて最高です。」と言います。王様は腹が立ち、アシュタバクラを牢屋に入れてしまいます。

翌日、狩りに出かけた王様は、人食い部族に捕らえられ、神様への捧げ物として火あぶりにされることになってしまいます。覚悟を決めた王様ですが、火あぶりの前に人食い部族が王様の体を確認すると、指にキズが見つかりました。

人食い部族は、「指にキズがある奴を捧げ物にしたら大変だ!」と王様を解放しました。神様への捧げ物には、キズがあってはならないという決まりがあったのです。

この話の教訓です。私の考えを書きますが、生徒の皆さんは自分の意見を持ってください。

この寓話の主題は、**「起きた出来事を、どう捉えるか」**ということだと考えます。

良い出来事は自分の宝物となり、時折、思い出すと元気をもらえる存在です。一方で、悪い出来事は、どう考えるべきでしょうか。**過去の出来事を変えることはできません。私たちにできることは、悪い出来事に対する見方を変えることだけ**です。哲学的に言えば、「起きたことも、起こらなかったこともすべて最高である」と自分に言い聞かせ、ひとまず過去を受け入れます。そうすることで今の自分の行動を肯定し、未来に目を向けることができると考えます。過去は過去のためにあるのではなく、未来のためにあるのですから。

もう一つ、古書店街で購入した洋書の中から、イソップ寓話の有名なお話、「ロバと親子」を紹介します。

親子がロバを連れて歩いていました。すると、道ばたで水汲みをしていた少女たちが「どちらかロバに乗ればいいのに」と言います。父親はその通りだと思い、息子をロバに乗せました。しばらく行くと、今度は老人が「若者よりも年老いた父親のほうがロバに乗るべきだ」と言います。父親はそれもそうだと思い、息子を下ろして自分がロバに乗りました。しばらく行くと、子連れの女の人たちがこれを見て「子どもだけ歩かせるなんて恥知らずだ」とののしります。父親は息子もロバに乗せることにしました。しばらく行くと、若者たちが「小さなロバに2人も乗るなんて動物虐待だ」と２人を責めたてます。「それもそうか」と思った父親は、息子と2人でロバを担いで行くことにしました。町の人はこの様子を見て大笑いします。その後、不自然な姿勢を嫌がったロバが暴れだします。不運にもそこは橋の上で、暴れたロバは川に落ちて流されて死んでしまいます。

この寓話から得られる教訓は、次のように考えます。

全ての人に好かれることはできません。言い換えれば、**「誰かに嫌われることを恐れてはならない」**ということでもあります。**自分を嫌う人がいるのは、自分が自由に生きる代償であり、自由に生きている証拠でもあります。嫌われてもかまわないと思うことは、人生を自由に生きるために必要なことです。**

図書館を使った調べる学習コンクール

定時制課程　国語科

11月5日、新宿区角筈区民ホールにて、令和5年度「第15回新宿区立図書館を使った調べる学習コンクール」の表彰式が行われました。

「館長賞」に輝いたのは、普通科１部１組の林りおんさんの「投票率の低下と民主政治の在り方」です。

「優秀賞」に輝いたのは、普通科１部１組の小口未来さんの「地域コミュニティーの活性化に寄与する建築とは何か―「武蔵野プレイス」と「ヘルシンキ中央図書館『Oodi』」を題材に」です。

２人には表彰状が授与されました。

「調べる学習コンクール」は、身近な疑問や不思議に思うこと、興味があることについて公共図書館や学校図書館の資料などを利用してまとめた論文を応募するコンクールで、今回、**新宿区内の都立高校や私立高校に通う生徒から２１６作品が出品され、審査の結果、４作品が入賞しました。**

館長賞２名、優秀賞２名のうち、新宿山吹高校生が１名ずつ受賞するという快挙でした。

この４作品は、新宿区の代表としてこれから全国審査に進みます。全国審査の結果が判明するのは来年１月頃です。

林さんの論文は、日本と世界の投票率を比較しながら、日本の民主主義の問題点に言及しつつ、若者の投票率の低さの原因についての考察や対策を提言しました。

小口さんの論文は、建築が地域コミュニティーの活性化にいかに寄与するかという問題を、武蔵野市にある図書館を中心とした多目的公共施設「武蔵野プレイス」とフィンランドの中央図書館「Oodi」（オーディー）とを比較しながら論じました。

「調べる学習コンクール」の全国大会の過去の受賞作品は以下のURLから閲覧することが可能です。
URL：https://www.toshokan.or.jp/contest

令和５年度外国語体験講座受講報告

通信制課程教務部

７、８月に東京都教育委員会主催の外国語体験講座（イタリア語、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語）が開講されました。
本校からは８名の生徒が興味関心を持って受講し、修了証が渡されました。１言語１日の講座で、３日間かけて３言語修了した生徒もおりました。

受講した生徒の感想は以下のとおりです。

・同じ言語を学ぼうとしている同年代の子たちと交流できる良い機会になりました。
・英語以外の外国語を学ぶ機会があってとても良かったです　　。　　。
・1日で基本的な挨拶や自己紹介、発音などがわかるようになり、とても嬉しかったです。

岩田悠花さん（スペイン語）

定時制課程　学校行事予定

11月９日（木）自己探索学習⑥
10日（金）遠足
23日（木）勤労感謝の日
24日（金）自己探索学習⑦
29日（水）後期中間考査時間割発表

通信制課程　学校行事予定

11月11日（土）スクーリング　２－５
18日（土）スクーリング　２－６
23日（木）勤労感謝の日
25日（土）スクーリング　２－７
12月２日（土）スクーリング　２－８